

入院中の子どもたちに笑いを通じて精神的なケアを行うホスピタル・クラウンが、東日本大震災の被災地で活動している。避難所を巡り、風船やボールなどを使ったパフォーマンスで子どもたちの笑顔を誘い、「一度限りではなく、何度も足を運んで、笑顔を取り戻したい」。クラウン(道化師)たちは28日も宮城県気仙沼市内の避難所で笑いを振りまいた。

同市立小泉中学校の体育館に、赤い大きな鼻とカラフルな衣装をまとった3人

☐ **ホスピタル・クラウン** 全国の病院を巡回し、様々なパフォーマンスを通して入院生活を送る子どもたちと触れ合う。2005年に設立された日本ホスピタル・クラウン協会には約40人が登録している。衛生面に配慮し、通常のクラウンよりメークは抑え、大きな靴やフリルが付いた衣装も医療機器に引っかかるらないよう簡素なデザインにしている。

## 風船、曲芸…笑顔再び



のクラウンが姿を見せると、子どもたちが駆け寄っていった。「また来たよ」。

クラウン名「シャンティ」の村木美智さんが声をかけると、子どもたちから歓声

# 病院道化師 避難所巡り

が上がった。

体育館では今も約1000人が避難生活を送っている。3人は細長い風船を色々な形に変えるバルーンアートを披露したり、一輪車に乗って軽妙な曲芸を見せたりした。子どもたちだけでなく、お年寄りも加わり、笑いの輪が広がっていた。

「ここは3回目の訪問。不自由な避難所生活の中で、少しでも日常を忘れて素直に喜んでもらえれば」。そう話す村木さんの傍らで、小学4年の及川美知さん(9)は「いろんな演技が見られて楽しかった。元気になった」と声を弾ませた。

3人は名古屋市内に本部を置く日本ホスピタル・クラウン協会に所属している。同協会理事長の大棟耕介さん(42)は「クラウンの役割は目の前の相手を楽しい気持ちにさせること。主役はあくまでも相手。自分の芸を押しつけてはいけない」と話す。

避難所を訪れたクラウンの演技を楽しむ子どもたち(28日、宮城県気仙沼市)。「加藤学撮影」

## 名古屋の団体 今月から 宮城・福島へ

クラウン歴18年の大棟さんは国内のホスピタル・クラウンの草分け的存在で、中越沖地震(2007年)では仮設住宅を回った。チエルノブイリ原発事故の影響が残るウクライナの小児病棟も巡ってきた。

同協会はこれまで、東北地方の病院も定期的に訪問していたが、地震の後、病院にいた子どもたちは他の病院に転院するなどした。それでも、避難所にいる多くの子どもたちに笑いを届けようと、今月から宮城、福島県内の避難所を中心に巡回している。

「同情からは何も生まれない。避難所で暮らす子どもたちに楽しい時間を過ごしてもらい、地震が起きる前の素直な自分を取り戻す手助けができれば」。大棟さんは、今月中旬に訪れた避難所で一緒に写真を撮った少年が「カメラもアルバムも全部流されたから、初めての写真だ」と喜ぶ姿が忘れられないという。

小泉中の体育館に笑い声が響いてから約1時間。シャンティら3人は、「また来るね」と声をかけて、体育館を後にした。いずれ自分たちが訪れることがなくなる日が来ることを信じている。「だからこそ、自然と笑顔が戻る日まで足を運びたい」